

生涯スポーツとしてのトライアスロンの普及と発展について

～大学生トライアスリートを対象として～

生涯スポーツゼミナール 1316007 伊藤 将隆

1. 研究動機・研究目的

近年日本国内において、トライアスロンの競技人口の増加が著しい。2015年のデータによると競技人口は37万5000人であり、日本で初めてトライアスロンの大会が行われてから約30倍も増加した。また、世界国内競技人口ランキングでは第2位であり、日本はトライアスロン先進国といっても過言ではない。しかし現状は、メジャーなスポーツと比較して国民の全員がどのような競技かを理解しておらず、まだまだマイナースポーツであることは間違いない。また、学生のうちにトライアスロンを始めた者に対しても卒業後には競技をやめてしまう人が多数存在することから、スポーツに対する競技志向意識がまだ日本のスポーツ文化に根付いており、生涯スポーツとしてのこの競技の普及・発展につながらないのではないかと私は疑問を持った。

そこで本研究では、日本学生トライアスロン連合に所属するトライアスリートを中心に、今後より一層トライアスロンが生涯スポーツとして普及・発展するためにはどうすべきかを結論付けることを目的とする。

2. 研究方法

本研究における調査は以下の方法で実施した。

- (1) 調査方法：WEB アンケート調査、複数人によるインタビュー調査
- (2) 調査対象：日本学生トライアスロン連合に所属する大学計18校141人(男子109人、女子32人)
- (3) 実施期間：2019年10月中旬
- (4) アンケート項目
 1. 諸属性について：大学、性別、学年
 2. トライアスロンを知ったきっかけ
 3. トライアスロンを始めたきっかけ
 4. トライアスロンを始める前に一番不安だったこと
 5. 今までのスポーツ競技歴
 6. トライアスロンをやる前の競技での最高成績
 7. 現在トライアスロンを行う上で苦勞していること
 8. トライアスロンを続けることのできる源泉
 9. 大学卒業後の競技継続意思とその理由

3. 主な結果と考察

大学卒業後に競技を継続する者は全体の64%、継続しない者が24%、未定のものが12%

と言う結果が出た。継続意思がある者の理由の半数がトライアスロンそのものの魅力に気づいたと言うことで、それが継続する動機になっていると考える。一方継続意思のない者の理由の半数が練習環境の確保を難点としており、競技スポーツ志向の者が多い傾向にあることがわかった。

更に調査結果を交えて様々な比較を行うと、競技レベル別での継続意思では全日本学生選手権に出場できるかどうかのレベルの者が競技継続意思がある傾向にあり、それ以上の者は競技スポーツ志向が高いと言うことが、それ以下の者は部活やサークルなどの所属するコミュニティから抜けると言うことが継続意思がない理由になっていることもわかった。また、競技開始前での競技と比較した競技成績の変動別による継続意思を比較すると、競技力が低下した者が一番競技継続意思が高く、競技力に変化のなかった者が一番競技継続意思が低いことがわかった。その中で前者のうち全体の 3/4 以上が健康維持増進のために継続意思を示していること、後者のうち約 2/3 が今後の競技力の向上のために環境面の確保が難しいことから競技継続をしないということもわかった。

調査結果をまとめると、競技継続する者はすでに競技の面白さや魅力に気付いている、もしくはトライアスロンを生涯スポーツとしてのツールとして利用している一方で、競技継続をしない者はトライアスロンを競技スポーツとして捉えているが故に競技力が上がらない、競技をすることに疲れてしまったなどの理由から競技を継続しない傾向があることがわかった。

4. 結論

調査結果と競技を行ってきた自身の視点をもとに、競技が継続できる環境の増加、所属組織を通しての経験によって、より多くの人々が競技継続を検討するのではないかと考えた。その中でも特に、競技スポーツと生涯スポーツの垣根をなくす、大学在学時の部活・サークル内のコミュニティでの過ごし方、この 2 点の環境を改善することによって現在の競技継続意思のない人の意識変化が起こるのではないかとと思われる。競技スポーツと生涯スポーツの垣根をなくすためには小学校時までの運動やスポーツの取り組みが重要であり、この時期までに身体リテラシーを高めておくことがスポーツの競技力向上だけでなく、生涯スポーツを楽しむ上で極めて重要なことがわかった。そしてトライアスロンに関わるようになってからは、トライアスロンに対するコミットメントの強化、チームの人間が練習内でのモチベーション維持ができる環境、組織内での信頼関係の構築、この 3 つの観点が必要になってくることがわかった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるに当たり担当教員である黒須充教授からは多大な助言を賜りました。厚く感謝を申し上げます。また進んでアンケート調査に協力していただき、本研究に必要なデータを提供して頂いた日本学生トライアスロン連合に所属する様々な大学の皆様にも感謝の意を表します。本研究の執筆に関わって頂いた全ての方々に、改めて感謝の意を表します。本当にありがとうございました。